

うちまあんせい

内間安理・俊子展 色を織り、記憶を紡ぐ

Ansei and Toshiko Uchima: Weaving Colors and Memories

2026年3月7日（土）－5月31日（日）※一部展示替え

神奈川県立近代美術館 葉山



内間安理
《Forest Byobu (Autumn-Stone)》
1979年
多色木版、紙 個人蔵

東京からニューヨーク、版画とコラージュによる50年

沖縄からアメリカへ渡った両親のもとに生まれた内間安理（うちま・あんせい/1921-2000、米国籍）は、少年時代をロサンゼルスで過ごした後、1940年に来日し早稲田大学で建築を学びました。戦時中も東京に残った安理は、戦後、恩地孝四郎の創作版画に感銘を受け木版画に取り組みます。1959年にアメリカに帰国してからは、ニューヨークを拠点に制作を続けました。1970年代後半、浮世絵版画の技法にもとづく「色面織り」の技法を確立し、色鮮やかな〈Forest Byobu 森の屏風〉シリーズにより評価を高め、1982年に病に倒れるまで旺盛な活動を展開しました。

大連で育った内間俊子（1918-2000、旧姓・青原）は、1935年、神戸に移り住み、小磯良平に絵画を学んだ後、1953年には瑛九らによる前衛的なグループ「デモクラート美術家協会」に参加しました。この頃、久保貞次郎や瀧口修造を知り、抽象的な油彩画や木版画を制作するようになります。1959年、夫・安理とともにアメリカに渡り、1960年後半からは詩情を湛えたコラージュやボックス型のアッサンブラージュの制作を始めました。その独自の歩みは、今まさに注目されるべきものといえます。

本展は、版画やコラージュ作品を中心に、二人の独自性のある豊かな創作世界を振り返るもので。安理については2014年、沖縄県立博物館・美術館で回顧展が開催されましたが、俊子については初期から晩年までの軌跡を辿る初めての機会となります。戦後の激動の時代において、創作だけでなく、日米のアーティストや文化人のネットワーク形成に尽力した両者の功績を再評価するとともに、イサム・ノグチや、長谷川三郎、棟方志功など関連作家の作品と併せて紹介することを通し、戦後美術の新たな一面に光をあてます。

展覧会のみどころ

1. 内間安理・俊子の創作の軌跡を振り返る

2014年に沖縄県立博物館・美術館で開催された内間安理展を踏まえ、今回初公開となる作品を含む内間安理の代表作を中心に紹介します。また、本展は内間俊子の初期から晩年までの活動全体を振り返る初めての展覧会です。

2. 戦後美術の新たな一面を紹介

二人の創作活動だけでなく、日米のアーティストや文化人のネットワーク形成に尽力した功績を再評価します。とくにイサム・ノグチや棟方志功、瑛九ら関連作家を二人の旧蔵作品を中心に紹介するとともに、戦後美術の新たな一面に光をあてます。

【作家略歴】

内間安理 (1921–2000)

- 1921年 カリフォルニアに生まれる。その後、家族でロサンゼルスに移る。
- 1940年 来日。早稲田大学で建築を学ぶ。戦時中は日本にとどまる。
- 1950年 来日したイサム・ノグチの通訳をつとめたことをきっかけに、生涯にわたる交流が始まる。ノグチを介し、長谷川三郎とも交流。
- 1954年 創作版画のコレクター、オリヴァー・スタッターの通訳として恩地孝四郎や棟方志功、平塚運一らのインタビューに立ち会い、スタッターの著書『Modern Japanese Prints: An Art Reborn』（タトル出版、1956年）の刊行に寄与。自身も版画家の道を歩み始める。
- 1954年 青原俊子と結婚。
- 1955年 養清堂画廊で初個展を開催。
- 1959年 東京国際版画ビエンナーレに選出される。アメリカに帰国。
- 1977年 浮世絵版画の技法にもとづく「色面織り」の技法による、色鮮やかな〈Forest Byobu 森の屏風〉シリーズを発表。
- 1982年 脳卒中で倒れる。
- 2000年 死去。
- 2014年 沖縄県立博物館・美術館で「色彩と風のシンフォニー 内間安理の世界」展開催。

内間俊子 (1918–2000 旧姓・青原)

- 1918年 中国の安東県（現在の丹東市）に生まれ、大連で育つ。
- 1935年 家族で神戸に移り住み、翌年から小磯良平に師事して絵画を学ぶ。
- 1953年 瑛九らによるデモクラート美術家協会の活動に参加。久保貞次郎や瀧口修造を知り、抽象的な油彩画や木版画、リトグラフを制作し始める。
- 1954年 内間安理と結婚。瀧口修造の詩に寄せた詩画集『スフィンクス』（1954年）に、木版画《魚の欲望》を収録。
- 1956年 吉田千鶴子、小林ドンゲらと女流版画会を結成。
- 1959年 アメリカに渡り、以後、ニューヨークを拠点に制作を続ける。
- 1960年代後半 コラージュやボックス型のアッサンブラージュの制作を始める。
- 1982年以降 夫の看病を続けながら制作を続ける。ストライプハウス美術館やニューヨークの画廊などで作品を発表。
- 2000年 死去。

開催概要

展覧会名：内間安理・俊子展 色を織り、記憶を紡ぐ
主催：神奈川県立近代美術館、東京新聞
担当学芸員：西澤晴美、大原万季
会期：2026年3月7日（土）－5月31日（日）
会場：神奈川県立近代美術館 葉山（展示室1、2、3）
巡回先：碧南市藤井達吉現代美術館（予定）
埼玉県立近代美術館（予定）
開館時間：午前9時30分－午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日：月曜日（5月4日を除く）
観覧料：一般1,200（1,100）円／20歳未満・学生1,050（950）円／65歳以上600円／高校生100円

- （）内は20名以上の団体料金です。
- 中学生以下の方と障害者手帳等、ミライロIDをご提示の方（および介助者原則1名）は無料です。
- 企画展「内間安理・俊子展 色を織り、記憶を紡ぐ」の観覧券で同日に限りコレクション展「たいせつなものII—近年収蔵の彫刻・立体作品から—」をご覧いただけます。
- ファミリー・コミュニケーションの日（毎月第1日曜日：4月5日、5月3日）は、18歳未満のお子様連れのご家族は割引料金（65歳以上の方を除く）でご覧いただけます。また毎月第1日曜日は会話を楽しむ日「オープン・コミュニケーション・デー」となりますので、小さなお子様連れの方も遠慮なくご来館ください。
- その他の割引につきましてはお問い合わせください。
- 最新情報と来館に際してのお願いは美術館ウェブサイト等をご確認ください。

プレス向け内覧会

会期前日、3月6日（金）にプレス向け内覧会の開催を予定しています。
詳細は別途メール配信にてお知らせいたします。

関連企画

美術館ウェブサイトにてお知らせします。

お問合せ先

広報担当：加藤、太田原、葉山
神奈川県立近代美術館葉山
Tel: 046-875-2800 Fax: 046-875-2968
E-mail: info.kinbi.474@pref.kanagawa.lg.jp
〒240-0111 神奈川県三浦郡葉山町一色2208-1
www.moma.pref.kanagawa.jp

同時開催の展覧会

葉山館 展示室4
3月7日（土）-5月31日（日）
コレクション展「たいせつなものII—近年収蔵の彫刻・立体作品から—」

鎌倉別館
-5月17日（日）
企画展「福田尚代 あわいのほとり」

その他の展覧会関連情報等は美術館ウェブサイトをご確認ください。

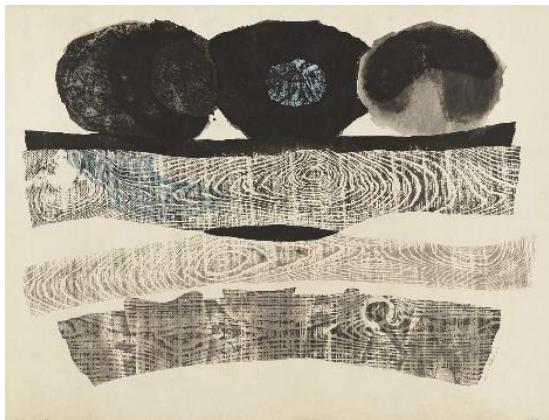
広報用画像データ一覧

本展広報のための画像データ（印刷用350dpi／オンライン用72dpi）をご用意しております。
ご希望の場合は次の必要事項を明記し、広報担当宛にEメールでお申し込みください。

展覧会名／希望画像アルファベット／データサイズ（350 or 72 dpi）／社名／媒体名／掲載予定日
／担当者名／連絡先

- A) 内間安理 《小さなアパート》 1955年（刷り：1956年） 多色木版、マルチブロック、紙 個人蔵
- B) 内間安理 《流れと草》 1961年 多色木版、紙 個人蔵
- C) 内間安理 《In Blue (Dai)》 1975年 多色木版、紙 個人蔵
- D) 内間安理 《Forest Byobu (Autumn-Stone)》 1979年 多色木版、紙 個人蔵
- E) 内間俊子 《オルゴール》 1955年 油彩、キャンバス 和歌山県立近代美術館蔵
- F) 内間俊子 《森の幻想》 1957年 多色木版、紙 個人蔵
- G) 内間俊子 《Downtown》 1982年 ミクストメディア 高知県立美術館蔵
- H) 内間俊子 《彼女の名はディジー》 1985年 コラージュ、パステル、紙 個人蔵
- I) 内間俊子 《His Baren》 1989年 ミクストメディア 個人蔵

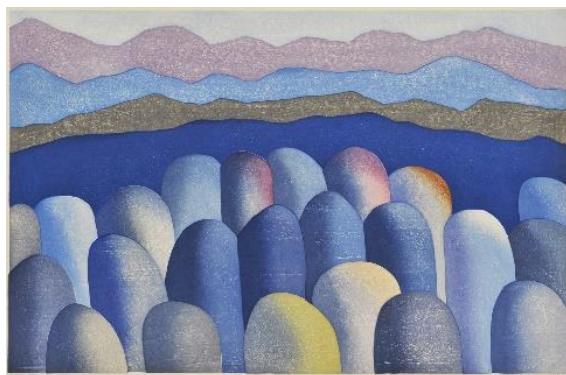
A



B



C



D



E



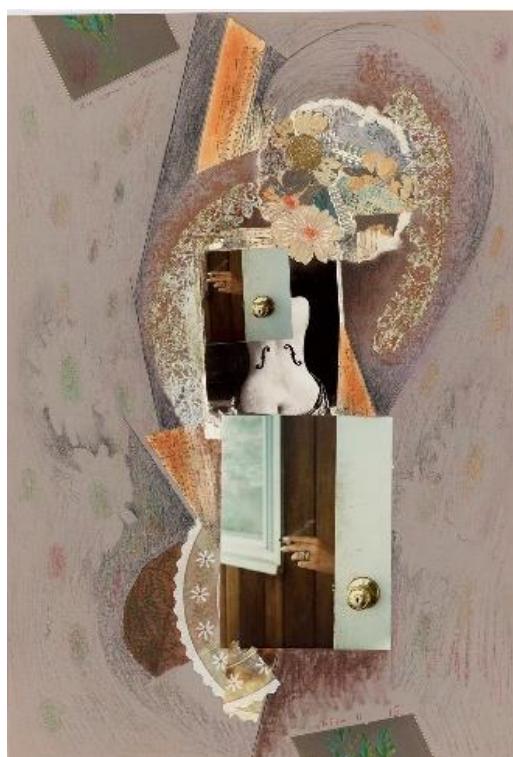
F



G



H



I

